

# 死の復讐

国枝史郎

青空文庫



季節は五月。花の盛。南方露西亞ロシアのドン河の岸は波斯ペルシャ毛氈もうせんでも敷き詰めたように諸々の花が咲いている。ジキタリスの紫の花はなびら弁は王冠につけた星のように曠野の中で輝いているし、紅玉ルビー色をした石竹の光はなは恰ちようど度陸上の珊瑚のように緑草の浪ゆらに揺れながら陽に向かつて微笑を投じている。

若い一人の放浪者がドン河に添うて上流の方へ疲労つかれた足付で歩いている。

蜜を漁る蜂うなりの唸うぐいす。藪で啼うぐいすいている鶯うぐいすの声。空の大海に漂いなが

ら絶え間無くうたう雲雀ひばりの歌など、地にも天にも春を言祝ことほぐ喜びの音が充ち充ちているが、若い放浪者の顔付には憂鬱ばかりが巢食っている。

どつちを見ても曠野である。ところどころに部落がある。それは哥薩克コサックの部落であつて鶏犬の声や馬の嘶いななきや若い男女の笑わらいご声えなどが風に運ばれて聞えて来る。

若い放浪者はドン河に添ようて矢張やはり疲労れた足どりで何処までも何処までも歩いて行く。そして其顔には恐怖と憂鬱しつこが執念しつこく巢食くっているのであつた。

やがて陽が落ちて夜となつた。

冴え切つた空には星の群が猫眼石のような変化ある光を互かわるが

替わに投げ合つて夜の神秘を囁くのを羨ましくでも思ったのか、  
 十六夜いざよいの月が野の地平線へ黄金の盆のような顔を出した。

ドン河の水は月光に射られて銀箔のように白く輝き、曠野は一  
 面に露でも下りたように鼠色に朦朧と光っている。

ぽかぽかと暖い夜の空気……甘く鼻を搏うつ野草の匂……雌雄めおの  
 夜鳥の睦さざめごと言……。

南露西亞の夜の風情は何んと美しくあることよ！ 併し美しい  
 この光景も若い放浪者には無価値と見えて目を上げて野面を見よ  
 うともしない。彼は疲労れた足どりでノロノロと歩くばかりであ  
 る。

どこまで歩くつもりだろう。どこから歩いて来たのだろう。夜

中彷徨さまようつもりかしら。大分疲労れているらしいのに。もし泊まろうと思うなら哥薩克の家を叩くがいい。彼等は喜んで泊めるだろう。それが彼等の道徳なのだ。

しかし若者は部落まで行つて家を叩こうともしなかつた。今にも倒れそうな足どりで彼はノロノロと歩いて行く。

哥薩克の部落を通り過ぎて涯も知れない曠野の姿が若者の眼前にあらわれた時には、流石に彼も心細くなつたか、小丘の上に佇たたずんで茫然ぼんやりとあたりを見廻わした。

丘の真下には僅の耕地と三軒の草屋くさやとが立っていたが十六夜の月に照らされてさも懐し気に見えている。

若者はじつと考えた。

それから丘を下りたのである。

一軒の家の前に立った時、どうやら家内が賑かで饗宴でも行われていたらしいので彼は黙って立ち去った。

そして夫れから彼に執つては「運命の家」とも云う可き所のもう一連の草屋へ這入ったのであった。

曠野は月光で光っている。ドン河の水は銀箔のように白く鮮かに輝いている。哥薩克の部落は既に睡つて燈火一つ見えようともしない。

曠野は寂しく静かである。

静かな曠野を驚かせて一隊の騎馬巡査が走つて来た。

トントントントンと哥薩克の家を彼等は軒別にどやしつける。

「……斯う云う若者が此のあたりをブラブラ歩いてはいなかつたか？」

鼻下の髭をピンと刎ね上げた警視ゴロネフは嚴めしい声で嚇すような調子で訊くのであつた。

「そんな野郎、知りましねえだ」

どの哥薩克もこんな調子で——快い睡を覺されたのが肝に障つたとしてもいうようにぶつきら棒に云い放す。

「何？ 知らないって！ 嘘を吐け！ 隠し立てをすると承知せんぞ！」

「それでも、そんな野郎、知りましねえだ」



彼等の答えは同じである。

ゴロネフ警視も仕方がないので馬を又先の方へ走らせる。

斯うして彼等は月光の下を鹿のように早く走ったが、小丘の頂上まで来た時に、目<sup>めのした</sup>下に見える二軒<sup>うち</sup>の家の其一軒の背戸畑の辺で拳銃<sup>ピストル</sup>の音の起こったのを突嗟<sup>とつさ</sup>にハッキリ耳にした。

「左側の家だぞ！ それ進め！」

ゴロネフ警視は真先に丘を向う側へ駈け下りた。そして、家と家に挟まれた耕地の所まで乗り付けた時、左側の家の背戸畑の上に俯<sup>うつむき</sup>向に倒れている人影を見た。彼は馬から飛び下りて人影の側へ走って行き、その人間を抱き起した。六十を過ぎた老人で、弾丸<sup>たま</sup>で心臓をやられたと見えて血を胸に流して息絶えていた。

「犯人を探がせ犯人を！ 真先に家の中を探がして見ろ！」

## 二

警官達は一斉に背戸口から家内<sup>なか</sup>へ這入ろうとした。すると、却つて背戸口を、家内の方から押し開けて、背戸畑へ出た男がある。驚ろきのために眼を見開き、口を大きく開けたまま警官達には目も呉れず死んでいる老人へ近寄つて行つた。例の放浪の若者である。警視は若者を認めるや否や死人をすてて飛び上がった。

「アルブズだ！ 捕まえる！」

<sup>たちま</sup> 忽ち、放浪の若者は両手に手錠をはめられた。それで初めて気

が付いたのか警官達を見廻わしたが、

「政府の犬めが！……もう駄目だ！」彼は頭を下げたのである。

「もう駄目だとも、もう駄目だよ」

逃げかけた獲物を漸くのことでとつ捕まえた猟犬のように、鼻をヒクヒク動かし乍ら、ゴロネフ警視は近寄つて来た。

「もう駄目だとも、もう駄目だよ」彼はもう一度繰り返した。

「ロストフの牢屋を破獄して君が逃亡して以来、どんなに俺は探がしたことか！しかし遂々捕まえた……アルブズフ君！大

学生君！ 無政府主義の志士たる君よ！ とんだ所で捕まったね。

まさかに僕も志士たる君を憐れな老人を打ち殺した殺人犯人として捕まえようとは夢にも想像しなかったね……もう駄目だとも、

もう駄目だよ。今度は君も助かるまい」

「何？ 僕が老人を殺したって！ そんな馬鹿なことは断じて無い！ 何んのために老人を殺すんだ？ 殺す理由わけが無いじゃない

か！ 僕と殺された老人とは今夜初めて逢ったんだ。老人は此このい家の主人なんだ。僕は老人にお願いして今晚だけ泊めて貰ったん

だ。老人は僕を憐れんで鮓にしんのご馳走をしてくれた。それから僕に室へやを呉れた。その室で僕は眠った筈だ。すると拳銃ピストルの音がした。

驚いて庭へ出たところを君達に捕ったというもんだ……僕は老人に恩こそあれ、怨むところはちつとも無い。なんのために老人を殺すんだ!？」

若者は怒いかりに顫ふるえながら鋭い声で弁解した。

其時<sup>その</sup>一人の警官が耕地を横切つて流れている小川の岸を漁つていたが警視の傍<sup>そば</sup>へ飛んで来て、何かひそひそ囁いてから棒切<sup>ぼうきり</sup>様<sup>よう</sup>のものを手渡した。

もう此頃<sup>この</sup>には饗宴<sup>まわ</sup>をしていたもう一軒の家の中から大勢人々が走つて来て、耕地の周囲<sup>まわり</sup>を取り巻いて此問答を聞いていた。中に其家の主人がいたが、何か口の中で呟きながら時々ニヤニヤ笑つたりして其辺を行つたり来たりした。やつぱり六十を過ぎ<sup>た</sup>していたが殺された老人とは似も似つかず脂肪<sup>あぶら</sup>ぎつていかにも壮健<sup>たっしや</sup>そうだ。チホンというのが彼の名で、殺された老人のイサクとは親の代から仲が悪く、二人の間の仲の悪さは此辺の部落でも評判であつた。

「何んのために老人を殺すんだと、どんなに君が呶鳴どなったところで僕はちつとも怖くはないよ」

警視ゴロネフは冷あざわら笑いながら、ぐんぐん訊問を続けて行く。

「ロストフの市を逃げ出す時」と、彼は厳かに言葉を改め、

「君は同主義の友人から拳銃を一挺貰ったそうだが、その拳銃はどこへやった？」

「別にどこへもやりはせぬ」

若者は片手をズボンへやってカクシの辺を探って見た。しかし其処にはなんにも無い。

「無い！」と彼は呟いた。その顔がいくらか蒼くなった。

「先刻さつきまで此処に有ったんだが……そうだ、寝る時までであったん

だが……」

「今は無いとでも云うのだろう——それは如何にも無い筈だ。君は老人を射撃してから自分の犯罪を隠くそうため拳銃を河へ捨てようとした。君は投げ込んだと思つたろうが、その実拳銃は河の縁から三寸ほど此方こつちで止まっていた。即、これが、その拳銃だ！」

彼は拳銃を前へ出して、若者の眼めのまえ前で打ち振つた。

「そうです、それは僕が友人から貰つた拳銃です……しかし、断じてその拳銃で僕は老人など撃ちません」

若者の声は打ち顛ふるえ、嘆願するように響いたが、警視は黙つて横を向いた。

若者は家の内へ引き入れられ仮に一室へ監禁された。

やがて部落の医者が来て死人の検死が行われた。たった一発の弾丸たまが死人の心臓を貫いている。そして一発のその弾丸は若者の持つていた拳銃まさしに正しくピッタリ合うのであつて、そして一方拳銃の方では六発込めてあつた最初の弾丸が一つだけ発射されているのであつた。若者の罪は争われぬ。彼が老人を殺さないで誰が老人を殺したろう？

ただ此処に一つ不思議なことは、死んでいる老人の右の手が草花の種子たねを握にぎっていることで、或は老人が裏の耕地そうかへ草花の種子を下している所を狙い撃ちされたのかも解らない。そうだ、そいつは解らない。



斯ういふ事件があつてから、二ヶ月の日が過ぎ去つた。その時部落の人達は、イサク殺害者ころしの若者が、死刑に処せられたということ。それを風のたよりに聞くことが出来た。それで一旦忘れかけたイサク殺しの一件が人々の間に甦えり、ひとしきり噂をされたけれど、やがて再び忘れられた。斯うして春も夏も過ぎ秋草の花が咲き乱れる初秋の季節が音信おとずれて来た。

或日、部落の人達が野遊びに行つた歸えり、路をイサクの家の裏手に出た。全く孤独なイサク老人がああいう有様で死んでからは其家に誰も住む者はなく、幽霊屋敷と云いふらされて荒れに荒

れたまま立っていたが、さすがに季節は争われず、家を囲んだ秋草が所得ところえ顔に咲いていた。見る影もない廃屋あばらやと清らかな秋草の対照とが一つの調和をあらわして中々捨てがたい風情なのを、その連中は嬉しがつて互たがいにはしやぎ乍ら見廻っていた。そして不幸なイサク老人が拳銃の弾丸で心臓を撃たれてそのまま俯向に倒れていた耕地の畔へ来た時に一斉に感嘆の声を上げた。虹が地上に下り敷いたのか、様々の宝石を零したのかと間違えられる程美しい花畑が其処に在ったからで、彼等は其処へ佇んだままだ惚う惚つとりと眺めていた。しかし彼等の恍惚は次第次第に醒めて来た。そして其代わりに渋面が彼等の顔を占領した。彼等は互に眼を見合わせ、暫しばらくじつと黙っていたが、突然「ワツ」と叫声をあげる

と人家のある方へ足を空にして一散に逃げ出した。

何が一体起つたのだらう？　彼等をそんなに恐れさせるどんな事が花畑にあつたのだらう？

何者か種子を蒔く時に、文字形にそれを蒔いたと見えて種子から生い出た草花の花が文字形なに崩れずに咲いている。そして其文その字は斯うである――

「チホンが俺を殺したのだ」

噂は忽ち拡がった。部落の人々は云うのである。

執念というものは恐ろしい。殺されたイサクは地獄の底から真ほん実の犯人を名差している。生前住んでいた屋敷の耕地へ秋草の花を媒介にして。

「チホンが俺を殺したのだと、怨みを述べているじゃ無いか。ほんとの犯人はチホンだったのだ。そう言えばチホンとイサクとは親の代から不和だった。チホンがイサクを殺したのだ。あの可哀そうな大学生は無実の罪で死んだらしい。贖の犯人が殺されて本当の犯人が生きていたでは成程イサクも浮ばれまい。その口惜しさが固まって耕地へ花文字を咲かせたのだろう」

間もなく噂は遥か彼方かなたのロストフ市へも拡がった。

事件を扱った法官たちは捨てて置くことが出来なくなって、止むを得ずチホンを召喚した。

部落の人達はそれを知ると斯う云ってお互に話し合った。

「ほんとの犯人が捕った。これでイサクも成仏するだろう」

それなのに、チホンは、十日ばかり経つと全然何事もなかつたかのように自分の家へ帰つて来た。

部落の人達はそれに就いて又おせっかひにも噂した。

「チホン奴めきつと旨い事を云つて法官をだましたに違いない」  
これが人達の意見であつた。

その実、チホンは法官に対して別に旨いことも云わなかつた。

彼は自分の思っていることをただ正直に云つたまでである。そしてそれには證據しょうこがある。それは予審の調書である。

念のため調書の一部分を此処へ掲げることによしよう。

#### 四

## 予審調書

チホン

「……何も彼も見通しの法官様。私は嘘などは申しません。

私は自分の思っていることをただ正直に申し上げます。

そうです、私とイサクとは親の代からの喧嘩相手で大変

不和でありました。実際私は幾度となくイサクの野郎を

とつ捕まえて殺してやろうかと思いました。ですから無

論イサクの方でも私が彼奴きやつを憎む位に私を憎んで居った

ことは、彼奴の態度や、他人の噂で私には解かって居り

ました。全体どうして親の代からそれほど不和かと申し

ますに、実は私も——恐らくイサクも、解かって居ない

のでございます。他人の噂によりますと、ずっとの昔、親々の代に、イサクの父親が私の父の田地を誤魔化したのが喧嘩の元だと、斯様に一人が云うかと思うと、又或人はそれとは反対に、私の父親がイサクの父の山林を無断で伐<sup>ばっさい</sup>截したのが喧嘩の元だと申します。どちらが本当でどつちが嘘か、私も知らずイサクも知らず、恐らく私達の親々も明瞭とは知らずに只無闇にいがみ合つたのではあるまいかと、斯様に思うのでございます。ところが此処に困つたことには私達両家の此不和を、益々不和に導くような或事情があつたのでございます。それは外でもありません、私達両家だけが部落と離れてたつた二

軒だけ、小丘おかの下に、加之しかも向かい合つて立つていること  
で、これが普通の仲でしたら、お互に寂しいのが媒介なかだち  
となつて却つて親しくなるのですけれど、いがみ合つて  
いる仲だとすると絶えず姿を見ているだけ憎みも怨みも  
益々溜まつて、不和が一層不和になり、終しまいの果てには  
衝ぶつ合かり合あう。ところが私達の仲と来たら憎悪に充ち充ち  
て居りながら面と向えばお互同士決して感情を表へ出さ  
ずに互に世辞の云い合いをして別しまれて了しまうのでございま  
す。ですから憎悪はお互の胸に張り切れるほど溜まつて  
いても疏通はけ口がないため益々溜まる。溜まれば溜まるほ  
ど内証する。どうで最後は解かっています。お互に陰險



な遣やりくち口で怨みを晴らすのがオチなのです……。ところが、無論この私はイサクを憎悪して居りましたが、しかし私の憎悪の方は、イサクが私を憎悪するよりも、量に於て少なかつたと思います。云い換えると私よりもイサクの方が遥はるかに私を憎んでいたと斯こういうことになるのです……」

法官「よしよしそれは解かつてる。お前とイサクとが不和であつて憎み合つていたということは、お前の説明でよく解かつた。しかし、それではお前の身が却つて危あぶなく険なりはせんか。お前は現在イサク殺しの嫌疑者として召喚おされているのだぞ。然るにお前はイサクとの不和を可お笑かしい

程くどく云うではないか」

チホン「このようにくどく申し上げることが却って私の嫌疑を晴らす一番の方法なのでございます」

法官「左様か、それでは云うがよいが、その前に二三訊くことがある。お前は拳銃を持って居るか？」

チホン「たしかに一挺持つて居ります」

法官「それはどのような拳銃か？」

チホン「子供用の玩具でございます」

法官「何、子供用の玩具だと？ 危険性を持っている玩具かな？」

チホン「弾丸はキルクでございます。その上糸が着いていまして決して遠くへは飛びません」

法官「馬鹿なことを申すな、馬鹿なことを！ それでは拳銃では

無いではないか」

チホン「ハイ、拳銃ではございません。けれど遠方より眺めますと本物の拳銃に見えますとみえて、イサクはそう思つて居りました」

法官「どうやらお前の言葉には何か別の意味があるらしい。いづれ説明を聞くとして……お前はあの晩自分の家でどのようなことをしていたか？」

チホン「私の誕生日でございました故、十人ほど友達を招きまして馬乳酒<sup>カス</sup>を飲み合つて居りました」

法官「イサクの殺された時刻は——たしか午前の二時であつたが、

お前は何をして居たか？」

チホン 「骨牌<sup>カルタ</sup>をやつて居りました」

法官 「どこで骨牌をやつていたか？」

チホン 「自分の家の喫煙室で」

法官 「幾人で骨牌をやつたのか？」

チホン 「友達三人とでございます」

法官 「友達の名を云つて見ろ」

チホン 「……クズミン。イワノフ。アレキセエ」

法官 「その三人の友達は、イサクが殺された其時刻にお前が室内に居たということを、お前の為<sup>た</sup>めに神に誓つて屹<sup>きつと</sup>度証明

するだろうか？」

チホン「必ずすると思います。もし御不審でございましたらその三人を御呼出しの上嚴重にお調べ下さいますよう」

法官「必要に依つて調べましょう——何かお前に云うことがあつたら成るな丈たけ簡単に云うがよい」

チホン「それでは先程の話の続きを申し上げることに致します：  
：私がイサクを憎むよりもイサクが私を憎む方がどうして多いかと申しますに、イサクの家が私の家よりひどく貧しくなつたことと、私はこのようにたっしや壯健ですけれど、イサクは肺病と胃癌とですつかり体を痛めて了つて余命少くなつたこととが其原因でございます。親譲りの怨みがある上にその怨ある相手の奴が——つまり私でございます

ますが、其奴そいつが自分より金持でもあり壮健でもあると致  
しましたら、全くそれは二重三重の怨を持つ筈でござい  
ます。私の友達はそれを案じて、早くこの土地を立ち去  
れなどと忠告したほどでございます。その友達の話によ  
れば、相手のイサクは死物狂いで、自分の命を匣に使っ  
ても、私の命を取るとか云って騒いでいるとかいうこと  
でした。そういう渦中に飛び込んで来たのがあの気の毒  
な大学生のアルブズフとかいう人でイサクはその人を一  
目見ると直ぐ泊める気になったのです。何故かと申しま  
すにその人が拳銃を持っていたからです。（チホンは此  
処で唾を呑んで少しの間黙っていた。それから一息に云

い出した）私の眼にはハッキリとあの晩イサク奴めが何を  
したか解かっているのでございます。勿論見たのではあ  
りませんけれど、見たよりハッキリ解っています。それ  
もイサクと争っていたこの私だけに解かるので他の誰に  
も解りません。

……イサクはあの晩あの若者を隣室へ泊めてやりまし  
た。それから若者が眠った頃、若者の室へ這入って行っ  
て、拳銃を盗んで戻って来ると、前まえ方かた蒔まこうと用意し  
て置いた種子箱から種子を握つかみ出し、肺病と胃癌とで窠やっ  
れ切った明日にも死にそうな体を運んで、裏の耕地へ出  
て行くと、例の文句を地面の上へ指で書き記し、そこへ

秋草の種子を蒔き、其手で拳銃を胸へ当てて引金を引いたのでございます。そして最後の力を揮<sup>ふる</sup>つて拳銃を小川へ投げ込もうとしてそれだけは遂々しくじりました。これが一切でございます。あのイサク奴を殺したのはイサク自身でございます。他の誰でもありません。但しイサク奴は何んのためにこんな芝居を打ったのか？ しかも命を棒に振って。……それは説明を要しますまい。何も彼も見通しの法官様にはまして説明は要しますまい。ただあの可哀そうないサク奴はそうでもしなければこの私へ復讐することが出来ない<sup>と</sup>健気にも思い付いたのでございましょう」







# 青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「秘密探偵雑誌」

1923（大正12）年9月

初出：「秘密探偵雑誌」

1923（大正12）年9月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の体裁は「デボン・マーシャル作、宮川茅野雄訳」です。

入力：門田裕志

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 死の復讐

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>